

文化高知 37

太平洋都市・高知

山田 一郎

国土地理院の「高知」の地形図を広げて、私は太平洋と浦戸湾と高知市の位置を改めて確かめている。

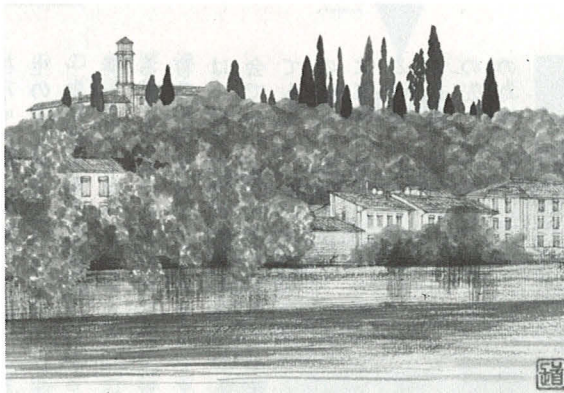
私はつい最近、仁井田から種崎、浦戸大橋と桂浜、南浦、長浜の海岸を車で一巡して来たばかりだ。そして私は、高知市は太平洋に直面する市域を持つ、全国でもほとんど唯一の県庁所在地であることを改めて確認した。

私は、共同通信社高知支局長の町田東君と、分県地図で太平洋に市域を持つ県都を一つ一つ調べてみたことがあった。

北では仙台市、南では宮崎市が太平洋沿岸にまで行政区域を持つているけれど、高知市のように直かに太平洋に南面しているわけではない。仙台空港に二、三度、離着陸したことがあるが、上空から見る海は冷たく、太平洋という温かい感じはなかった。宮崎市は明るいけれど、日向灘は東に開けていた。太平洋はやはり南に広がってほしい。

桂浜の龍頭岬から長浜の七軒家、

春野町の戸原との境界までを測ってみると約四キロの海岸線が太平洋の



教会のある丘「フィレンツェ」別府道雄

波に洗われていることが分かる。浦戸湾口を隔てた種崎の鼻から仁井田

を経て南国市の十市の阿戸と仁井田分の砂地の境界までがやはり約四キロである。

高知市は八キロに及ぶ海岸線で太平洋に接しているのである。

高知市と市民たちは浦戸湾の再開発とか、ウォーターフロント計画とかには熱心のようなのだが、その向こうに広がっている太平洋の立地と風光には余り関心がないように見受けられる。浦戸湾は太平洋の開口部であり、高知市はその潮流が差し込んで来る全国でも稀れな県都であることを忘れてはならない。

高知市は「太平洋都市」であることを改めて認識したい。

太平洋に接する八キロに及ぶ海岸線を誇りにし、この景観の保全と利用を市民のために考えるべきであろう。

「太平洋都市・高知」を宣言してはどうか。新しい高知市の未来図が豊かなイメージをもって広がって来るように思われる。

(高知新聞社客員)

高知に想いを寄せて

種谷 睦子

私は高知に帰ると、めったに車に乗らない。歩くものだという子供の頃の習慣が郷里に戻ると蘇ってくる。それは同時に懐かしい場所がゆつくり見られなくて勿体無いと思うからだ。戦争で焼き出された従姉一家が四、五年間余り我家に同居し、子供だけで合計十二人。昼間は近所の子供達も加わって軍団をなして外で遊びまわり、夜は家を運動場のようにして一日中遊びに明け暮れた。私はチビながら泣かしても泣かされたことのない、まさに「女のえらもん」を地でいった男が女かわからない子のようにだった。

その頃、近所のピアノスト西岡先生のお宅から時折、木琴とピアノのアンサンブルが聞こえて来た。女学生、山崎桂子さんが奏しておられたのだ。私は、その軽やかな音色にすっかり魅せられ気に入っていた。「木琴買って」と毎日ねだった。小学一年になった時、父は「級長になったら買うちやるきに」とのこと。

今年、私たちの町は町制施行50周年を迎える。この一つの節目が「地域活性化」や「ふるさと創生」の波を背景に相重なり、年度当初からイベントラッシュである。これまで文化果てる地と言われたこの町には考えられないことである。この文化果てる地に文化をと、私たちは多くの仲間たちと「佐賀町ボランティアの会」という組織を七年前に結成した。そして今では、町50周年記念行事実行委員会や町の文化推進協議会のお手伝いをさせてもらえるまでになった。それが先日の高知新聞に「町政停滞」という記事で「記念イベントを実施中だが、行政・町民一体となって盛り上げてない。」として実際は私たちがお世話させていただいた木下恵介監督を迎えての平和映画祭やローランド・ハナさんと中山英二さんとのジャズコンサートまで引き合いに出された。私たちはこれまで、そうした盛り上がり欠けるさまざまに必要因とは別のところで、町民に対して文化とは何か、人間とは何かを提起しそれを活動の目標として来たところである。ある時私が敬愛する老師は、人集め、仲間づくりを最大の難題とするこうした活動に対して、「簡単に人が集まれば活動などしなくていい、そのためにやってくるのじゃないの」と、励ましてくれた

運よく先生が決める級長に選ばれ、その日のうちに卓上木琴を買って連れて行ってもらった。木琴と私との出会いである。遊びの中には学芸会ごっこがあり、歌う人踊る人に分かれて遊んだ。姉達の指導により仕上げれば近所のおばあさんを招いたりある時は幼稚園を借りてまで人に見てもらっていた。童謡はその頃ほとんどと言っつよい程覚えた。川田正子・孝子姉妹を追手前高校の講堂へ、鰐淵晴子のバイオリンを公民館へと聴きに行ったり、バレエの音楽と踊りには目を見張った。木琴のけいこは、中水道から堀詰まで毎回道草をしながら通った。道中の楽しみは、プロマイド写真店の前で、入れ替っている写真を見つけることであった。映画スターや歌手の名前には実に詳しくかった。姉達は、御飯より映画が好きで、知寄町のやまと館から、上町五丁目のちとせ館まで私を連れて東西に渡り歩いた。小学六年になって寿町へ移ると、

隣は当時小津高校の音楽の先生吉良先生のお宅であった。音楽の先生方の演奏や、高校の生徒さん達のオペラ「手古奈」の練習などが聞こえてきたものだ。木琴は山崎先生、江ノ口小では麻岡先生、付中では真鍋先生のご指導を受け、中学の二年間は、一年先輩の横矢多絵さんがずっと伴奏をして下さった。恩人の諸氏である。又、年に一度開催されていた教育委員会主催の子供音楽コンクールは、意欲をもってチャレンジした機会であり、ベストを尽す習慣を与えてもらったと思っている。中学二年の時、木琴の先生が上阪され、同時に家の事情も相まって、音楽を続けるのならばと一家で上阪した。大学卒業後暫くの間、一カ月に一回、現場の先生方の依頼により子供達に指導の為帰って来た。その時育った数名



ニューヨーク・カーネギーホールでの演奏 1989.9.20

が東京などで専門家として活躍されていることは嬉しい事である。又、今年から日本木琴協会高知支部が発足し地元での発展が楽しみである。マリンバ……木琴の一種……長さ三メートル余り、運ぶ時は分解してアルミニウムのケース五個に納め二百キログラム近い。卓上木琴を奏き始めた頃には将来こんな大きな楽器を演奏することなど想像もしなかったが、あれから四十年の歳月が流れていた。

「高知から立派な政財界人が多く出ているが、県外に出ると郷里に恩恵をもたらす人は少ない。」ということを知った。真偽の程は判らないが、郷里との交流が少なかったと解釈してよいのではないかなと思う。文化の面でも出身者であるなしにかかわらず、日本の、いや世界の人々ともっと交流する土地柄として発展してほしい。人間の生きざまそのものが文化であることから、高知の特性を活かし、高知ならではの発想による企画演出が必要である。その為には、行政、企業からの多大の投資のもとに多様な価値を複合せせ継続させていかなければならない。歴史的な集積の上に新しい文化の創造を願ってやまない。

(マリンバ奏者・大阪信)
(愛媛学院短期大学教授)

ことがある。そうした活動の苦勞や喜びをこの二つの催しを通して、又各地で懸命に文化活動に取り組んでいる仲間たちの分も含めて述べさせてもらうことにする。

四月二十一日、私たちの町に日本映画の巨匠、木下恵介監督をお迎えし平和映画祭を開催した。監督にお越しいただいたのは金の力でも人脈でもない。熱意だけである。もちろん

童四百名余りの授業総見や町内外より参加下さった二百名余りの方たちこそ、私たちの祈りにも似たテーマの成果なのである。

五月二十八日は、世界的なジャズピアニストのローランド・ハナさんと日本を代表するベニシスト中山英二さんによるジャズコンサートジャパニツアー90であった。著作権や肖像権といった権利がずさんな日本と

いい加減に
えーじゃないか

浜田憲一



ん私たちは鼻っからこれしか持ち合せがないのだ。そして何よりも各地の仲間たちも含めた自主上映グループが、監督たちの意志を手足となって訴え続けている現状なくして実現しなかったのである。木下監督の講演、町内の若者たちによる朗読劇そして二本の木下作品を内容とするこの平和映画祭は、確かに町全体という点では盛り上がり欠けたかもしれない。しかし、町内全小学校児

違ふハナさんの場合、少々お金が必要なことも承知の上で録画と録音の返事は「その場の感動を、その時のハートに刻んで欲しい」だった。私たちに次の言葉があろうはずがない。その夜の二人の演奏は、二百五十名余りのすべての聴衆を別世界へと誘ってくれるすばらしいものだった。これも私たちの町だけのイベントというより隣接市町村の多くの協

力者たちに支えられたものだったが、あの夜の震えるくらいの感動が今も心深く刻まれているのは私一人ではあるまい。

元来、文化とは民衆の血と汗と涙の結晶である。時の権力者たちの残した有形無形の文化財もすべて民衆のものなのである。そして、長い歴史の中で現代程芸術文化が低迷している時代もないであろう。それは日本人一人ひとりの質の低下としか考えようがなく、昨今流行の人材育成という言葉自体そのことを物語っている。かつて、我が土佐の先人たちは、故郷を捨て、肉親と別れ、命までも投げ出して新しい日本の夜明けを夢見た。そうした幕末の志士や自由民権運動家たちを思う時、ただ申しわけなく恥しい。なぜなら、私たち自身、地球環境、核、飢餓……といった様々な課題に直面していることでは、先人たちと同じ立場に置かれているからである。それがもう、何十年も「えーじゃないか、えーじゃないか」と踊り続けてはいないか。

巨大な社会構造の渦に否応なしに呑み込まれている日本人に、果して五分の魂は残されているのだろうか。この金文化だけの社会が土石流のごとく崩壊する前に、早くみんなで手をつなぎたい。

(佐賀町ボランティアの会)

県内すべてをめぐる子どもたちに 夢と希望と創造を

—「子ども劇場」十九年の歩みから—

土居フミ子

「高知子ども劇場」が高知市に誕生して来年一月で満二十年になります。当時の資料をみると、「会員250名、会費150円、入金金100円」とあり、改めて時の流れを感じます。当時、お父さん、お母さんといっしょに「西遊記 人形ファンタジー」(ガイ氏即興人形劇場)や「天狗の笛」(劇団ひまわり)を観た子どもたちも、すでに二十四、五歳の青年です。学校の先生になった人もいます。お医者さんの卵もいます。父親や母親になって、我が子と入会する日の近い人たちもいるのではないのでしょうか。

あれから十九年。県内の各地に「子ども劇場」「おやこ劇場」がゆつくりと、時には競い合うように生まれ続けてきました。そして、現在は県内九つの市すべてと、土佐山田町、佐川・日高・越知が二町一村のままとまりの中で、「子ども劇場」を作っています。県内で一番早く発足した高

知市は、その後小学校区を基礎に五つの「劇場」へと分割しました。

毎月会費を出し合っており、子どもの文化をより豊かなものにと願う大人たちの心と力が、この十九年間にどれほど多くの例会鑑賞活動を支え、どれほど多くの自主的な活動——子どもまつり、高学年キャンプ、スポーツ大会、読書会や映画会、親子料理教室……などを生み出し続けてきたことかと思うと、一つ一つの経験の積み重ねが「劇場の歴史」なのだといふことができます。

子どもたちの育つ環境を見つめるとき、ともすると目の前の現実の厳しさに流されますが、「こうなるといいね」とか「それは矢張りおかしいよ」としゃべり合える仲間の存在は、子どもたちにとっても、大人にとっても自分の考えや生き方を確かめ直したり、厳しさにたち向かう力を支えてくれます。「子ども劇場」

れる中で、県のまとまりを確かめ合いました。

一つ一つの劇場の力はまだ十分に地域に責任もてる状況に至っていませんが、その中心となって子どもの文化に関する仕事のプロをめざす事務局の人たちが安心して働ける条件と補償の確立は急がねばなりません。また、我が子を含む地域の子どもたちの「子ども時代」とその将来を共に考え合い支え合う仲間づくりも、もともとと進めてゆかねばなりません。県協議会運営委員会は県内の子どもたちの状況を出し合いながら高知の子どもの文化を高めようこと

をめざして具体的なとりくみを協議しはじめています。

夏休み直前の七月十一日、県民文化ホールは、県協議会発足記念公演「ハンガリー おどりの旅」を楽しむ人たちが一杯でした。素朴な音楽と東ヨーロッパの人々のくらしの中から生まれた民族舞踊の数々は、とても好評でした。

翌日はエルケル舞踊団の総勢三三名を囲んで、高知市を中心に「エルケル舞踊団とダンス交流会」を企画しました。県内在住の留学生やその夫人(五カ国から六人)が参加して

の二本柱——例会活動と自主活動を通じて私たちが今までも、また、これからも大事にしていこうと考えているのは「仲間と共に育ち合う」ことだと思っています。

子ども劇場の発足とひろがり

※作品名は第1回例会作品

- '71年1月 高知子ども劇場 発足
「西遊記・人形ファンタジー」ガイ氏即興人形劇場
- '81年7月 土佐市子ども劇場 発足
「でぶっちょライオン」劇団2月
- '82年3月 中村子ども劇場 発足
「アニメイム・サンちゃんの家」劇団風の子
- 6月 土佐山田子ども劇場 発足
「ねこは生きている」人形劇団京芸
- 7月 安芸子ども劇場 発足
「風からきいた話」前進座
- '83年6月 土佐清水子ども劇場 発足
「西遊記」人形劇団むすび座
- '86、10 土佐清水おやこ劇場に改名
- '84年2月 宿毛子ども劇場 発足
「グリックの冒険」人形劇団京芸
- 4月 高知子ども劇場分創
高知東・西・南・北・中子ども劇場発足
- '86年9月 室戸子ども劇場 発足
「うたうおもちゃ箱コンサート」音楽文化集団ともしび
- '87年3月 須崎子ども劇場 発足
「うたうおもちゃ箱コンサート」音楽文化集団ともしび
- '88年10月 南国市子ども劇場 発足
「京のはたる火」人形劇団京芸
- '89年1月 佐川・日高・越知子ども劇場 発足
「魔法をかけられた王子たち」劇団ひまわり



高知県子ども劇場・おやこ劇場協議会発足の日のレセプション風景



「チャルダージュ」東北ハンガリーに古くから伝わる酒場での踊り

—「ハンガリーおどりの旅」当日の感想アンケートから—

- ・わたしは初めて見ました。これがハンガリーのおどりと思いました。それでなみだがこぼれました。なんのなみだかというところ初めて見れたからです。わたしはハンガリーのおどりを覚えて気づいたことだけ、おどりの中心が足、手の音です。とってもむずかしそうです。それから男の服が、じみのとカッコいいのがあります。女の人は、ほとんどじみでした。とてもおもしろかったのがムチの音でした。ムチの音が花火のような音でした。ときどき女の人の高い声がおもしろかったです。(高知北 山岡安美 10歳)
- ・すごくたのしい音楽とおどりでした。来てよかったって、すごく思っています。とにかくすごかった。まい日練習してたのだからと思った。かんだうしてしまっ。(高知市 松元みわ 9歳)

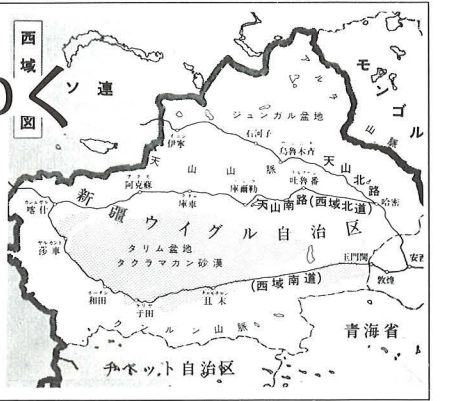
稽古中のいけ花を展示してくれたり、お茶やお琴のご披露もありました。交流会後、桂浜へ案内しましたが、生まれてはじめて海を目の前にした団員が、夢中になって波とたわむれるのには、ハラハラさせられ通しました。

素適だし、いろんな人たち(年齢を超えて)と出会うことはとても大事だと考えています。自主活動や例会鑑賞活動を幼い時から積み重ねてきた子どもたちが、五年、十年、二十年後にどんな大人に、どんな親になってくれるだろうと考えると、目の前に山のようにある重たい課題が、やり甲斐のある宿題のようにも思えます。

私たちは、子どもたちの成長にとって、生きる力を養い育てる場が、その子の周りにたくさんあることが

あなたの近所に、或いは職場に、ぜひ「子ども劇場」のサークルを作っていただけませんか。

(高知県子ども劇場・おやこ劇場協議会運営委員長)



タクラマカン砂漠をゆく

上 砂漠への思い

岩松 弘記

砂漠といつて何が思い浮かぶであろうか。地平線、オアシス、そして陸の船ラクダ。私は、そのラクダに乗り、中国大陸の中央、天山山脈と崑崙山脈に囲まれたタリム盆地にある、日本が二つすっぽりと入ってしまうタクラマカン砂漠に行ったのです。このタクラマカン砂漠は、古代中国王朝と西洋諸国とを結ぶ道、「シルクロード」の舞台なのです。昔、西洋人は、中国で産出される絹を非常に珍重し、競ってこれを手に入れようとしていました。

その道は大別して三つの道がありました。北から草原の道、オアシスの道、海の道です。草原の道とは、文字通り天山山脈の北方、キルギスの広大なステップ地帯を行く道。オアシスの道とはタクラマカン砂漠を渡る砂漠の道。この道はさらに、天山北路、天山南路、西域北道、西域南道の四つに分けられます。そして海の道、この道は、時代が比較的下り、大量に物資を運ぶようになってからひらけた道です。

はじめになぜ私がシルクロードに行く決心をつけたか少しお話しします。私は幼ない頃から中国の歴史には非常に興味をもっていました。別にシルクロード自体に興味をもっていたわけではなかったのですが、中国の歴代王朝を調べて行くうちに、

面白い共通点を見つけたのです。それは西域の経営でした。最初からシルクロードの存在は知っていましたが、なぜ国々の王が、それほどまでにこの道に、固執するのかわかりませんでした。しかしそれに対する答えが出た時、私は初めてシルクロードに興味をもったのです。その答えは、文化とお金の流入です。これを手に入れようと、やっつきになっていたのはないかと。そうになると、匈奴・突厥やチベット・吐蕃がなぜ敦煌や高昌（トルファン）を、制しようとしたのかの説明つづきのです。

では、その文化とはどんなものだったのか。そしてそれらの文化が東西に流れた経過はどうであったかを知りたくてたまたまになりました。そこで、大学は東洋史のある学校にいき歴史を勉強するつもりでした。しかし去年三月、大学受験のふたをあけてみると、高知大学にしか合格していなかったのです。はつきり言って少しショックでした。しかし合格した大学で精一杯のことをしようと思ひ入学。入学してすぐの五月、読売新聞で何とシルクロードの探査隊員の募集を知ったのです。一般公募の隊員は五名。私は迷わずその総会に出席することを決意しました。もちろん両親の許可もとり、隊員になれなくても、だめでもともの気が

持ちで滋賀県の天津にあるシルクロード探査隊事務局に行ったのです。そして、ここでもう一つ幸運なことがおきたのです。総隊長の中井実さんは、「来る者は拒まず、去る者は追わず。同じ夢をもっている者みんな、この探査を成功させましょう。」といってくれたのです。私は即日、隊員になるための登録をすませました。私と同じ夢をもって隊員となった者は一六歳から六八歳まで、男女の割合は一对一の約一五〇名でした。そして、私達が踏破するコースは、タリム盆地の東端敦煌を出て、西端カシュガルまでの二七〇〇kmとなりました。

しかし、これから私の苦勞が始まりました。それは、この探査隊の隊員は月に一回大津の事務局で開かれる例会に必ず出席しなければならぬということでした。もし出席しない場合は隊員登録抹消ということになります。それでも、まだ六月、七月、八月はよかったです。九月に入るとトレーニングという名目も加わり、最低でも月に二回は大阪に飛ばなくてはならないのでした。(私も一応大学生なので、土曜、月曜にも授業があり、大阪へ日帰りするためにはやはり飛行機を使わざるを得ませんでした。)

そうになると、時間の次に問題にな

るのが金銭的なことです。大学生で、親から仕送りをしてもらっている身には、月五万円は下らない旅費(大阪から滋賀までさらにお金がかかる)は、非常に辛い。しかし、自分の夢である、シルクロードに行くためには、少しくらい辛いことがあると思ひ、辛抱しました。

この隊に最初登録した一五〇名の内、関西の人は八〇名。そのうち一月にあった最後の例会まで残ったのは約四〇名。なぜかという、関西は関西でも、大阪、京都近郊に住んでいる人は月に、二回集まるという

ことも無理ではありませんが、それ以外、例えば私のように遠距離から行く人は、月々の出費も無視できないし、やはり社会人は、会社を二カ月上休んでシルクロードに行くという事は、むづかしかったからです。それに加えて出発前の一月になつてから、中国国内で、私達が踏破するルートが変更されました。当初この計画が発表された時は、タクラマカン砂漠を、東西に完全踏破する、ということだったのですが、あまりにも中国の未開放地区に長く入りすぎるといふことで、敦煌から、カシ

ユガル方面にほぼ行ったところにある若羌(チャリクリク)という町(オアシス)までということになりました。これによる期間は約二カ月、走行距離は七五〇kmになってしまったのです。この結果をきいて、何人かの人は、隊を去ってしまいました。私もガッカリしなかつたといえ、ウソになりますが、それよりも、一般外国人の立入が禁止されている未開放地区に入れるという嬉しさが、先に立って、脱隊するといふことは、思いもせませんでした。しかし、これらのことにより、結

果的には最後まで隊員として残ったのは関西では二六名になっていました。これらの人々は、それぞれの問題を克服し、本当に中国に、シルクロードに行きたいという人達だったのでした。

※タクラマカンは、ウイグル語で「ほいて出られない」の意。カシの地帯は、関西国際旅行社発行「ガイド中国旅行」から。

関東地方における高知県人の集いの中心的存在は、関東高知県人会(会長三浦信義氏)である。昭和二年七月七日、山田土佐太郎氏他が発起人となり設立された。当初は土佐一木会と言つた名称であった。名称の示すように毎月第一木曜日に会合する。この伝統は現在も変わることはない。半世紀以上、伝統行事を継続して来た情熱には敬意を表したい。過去においては、入会基準が高かったが、昭和四〇年代後半頃からこの基準が緩和されたように思う。一木会は、昭和三二年に高知県人会と改称された。現在の会員数は一五五名である。

この会の方針は、「なるべく理屈を言わぬこと」となっているので、極めて紳士的で和やかなものとなっている。県人会は毎年、関東高知県人大懇親会を開催している。これは高知県出身者に広く窓口を開いている。例年、略々五百人前後の方が出席され盛大な会合となつており、県出身者の大いなる娯楽と邂逅の場所となっている。毎年、各市町村から産品を又各酒造会社からは銘酒を多く頂いている。有り難いことである。

集う

関東高知県人会

山中洋典

県人会とは別に、土佐二十日会と言つたがある。旧い会員のなかには板垣退助先生もいたと聞いているが、私はその歴史を知らない。東京黒潮会は、溝淵知事の発案で昭和三〇年に設立された。県内の企業の東京支店長、企業経営者を中心として構成されている。県の事業に協力すること、相互協力関係を確立することが会の趣旨である。この会の事務局は、高知県東京事務所商工部にあり県には大変な協力を得ている。

各地方ごとの会合がある。例えば宿毛会、幡多会、窪川会、嶺北会その他ある。又、各学校卒業生によつて組織される会合も盛んで、よくまとまっている。私の卒業した宿毛高校の場合も略々完璧に近い名簿が整備されており、毎年一回は懇親会を開催しているし、相互の交流も密に行われている。又、職場単位の会合もある。県人間の交流の度合いは想像を越えて盛んである。人はこうしたことをセクト主義と言つても知れない。然し、言葉、習慣、歴史を共有する者が相集い更に親睦を深めることは非難されるべき事柄とは思ひ。只、一世は熱心であるが二世は殆ど熱意を示さないように思われる。若者の関心が薄いの残念なことである。(弁護士)



けだるい午後、ミュージカル「南太平洋」の『バリ・ハイ』がバックに流れている。

「え、この作品はロジャース・ハマースタインが食事中に書いたものであってエー」

ミュージカル理論の講義を延々と続ける講師の口元を見つめながら、若かりし私は空想の世界に入ってしまった。南の島の女になった私は、恋をし、泣き、笑い、唄う。次の日は「ウエストサイド・ストーリー」のアンニタになり、『アメリカ』を所狭しと唄い、踊る。「マイ・フェア・レディ」「王様と私」「スイート・チャリティー」etc……

当時の夢を私は今、実現させようとしている。期は熟したという言葉がびつたりとくるほど高知のミュージカル人口は増えた。

「ミュージカル龍馬」が終って当時の仲間、散々に色々な場所、ミュージカル活動に取り組んでいる。中には首をかしげる様な安易な作り方をしている者もいるが、総じて、ミュージカルに燃えている。

この火を消さない様に守り育ててゆかなければならない。その一心で私はオリエントミュージカル「女達は詐欺師」を上演した。すべて高知の若者達の手で作った。台本、音楽、演出、振り付け、出演者、ス

タッフに至るまで真正正銘、土佐の地場産、手づくりであった。しかも既成の劇場を使わずに、まったくの空間である倉庫を劇場に変身させた。柱にペンキを塗り、幕を縫い、四方の窓を遮光し、ビール箱で客席も作った。すべてが何も無いところからの出発であった。

今にして思えば、一つの目標に向かって参加者全員が超人的な活躍をしていた様だ。頂上を目指して、一歩、地道な努力が続き、そのプロセスで味わう、数々の挫折と絶望感も体験した。参加者全員が仕事を他に持ったことであるのでなおさらのことである。それら一つ一つをクリアしてゆくエネルギーは並大抵のものではなかった。それができるのも「好きなこと」の為だからである。好きなことのためならば、どんな苦勞も苦勞と思わず平気でやってのけてしまおう。まさに物を作り上げる原点であろう。そして成し上げた後の充実感、この苦勞を共有した者だけが味わうことのできる甘い蜜なのである。しかも観客の熱い拍手というおつりがつくとあっては、これはもうこたえられない。これを味わったら、すべての苦勞はどこかへふつとび、次回作への意欲が湧いてくるのである。

演出面からいえば、頭の中でイメ

ージしたものが、現実となって一人歩きしはじめる。その瞬間のえもいわれぬ喜び。心の奥底で、手を打ちならし、こおどりする。人に「いやあよかったよ」なんて言われたりする、と、「そうですかあ」なんてうそぶいたりする。これは誰にも言えぬ自分だけの秘密の甘い甘い蜜なのである。

これからは地方だからという甘い考えは捨てて、地方だからこそ、本物を作り、守り育てていかなければならない。今、中央の文化は商業ベイスに乗せようとするあまり、たいせつな何かが失なわれ、心を動かされるものが少なくなってきた。かつて情報社会の今、地方にいる方が遅れているというコンプレックスと強迫観念からくる地道な努力のためによりレベルアップした文化が生まれつつある様に思う。地方から中央に向けて発信していく時代はそんなに遠い未来ではない様に思えるのだ……

しかし時々疲れる。特に文化に理解の少ない高知は疲れる。どんなに疲れてもなにくそ!!と起きあがらなければならぬ。なにくそに言う気にはさせるのも、おきかえれば高知のよさだと半ばあきらめにた気持ちで思うことにしている。

(スガ・ジャズダンス主宰)

はりまや橋のたもとに学校教育相談研究所を開所して足かけ三年になる。

今、はじめ、登校拒否、学校を理由にした自殺など学校に関連した問題が起ると生徒指導の充実が叫ばれ、すべての教師にカウンセリングの力を習得する機会を与えねばと行政はあわてる。

東京都では、平成十二年迄に都内小中高の総ての教師に(七万人とも言われるが)教育相談の講座を受講させようとして莫大な予算をつけ、スタートして久しい。又大きなプロジェクトとして「学校不適応問題検討委員会」があり、大きな期待を持たれている。

私は、一昨年暮れ、東京本郷にある出版社に研究所時代の友人十人ばかりに集まってもらった。外でもない、全学相という研究会はあるが、これとて年に一度中央で交流し合う程度のものであったので、これをもっと充実したものになりたいと考えていたからであった。

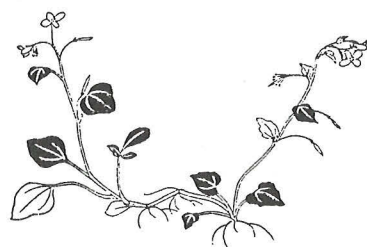
ちょうど都立教育研究所で二十五年の長きにわたって相談部長をつとめた小泉英二氏が早大に人間科学部が創設させるのを機にその学部の教授に就任することになった。これをいち早く耳にした私は東京にとんだ。小泉氏と私は旧いつきあいで、県

教育センターの相談室にいた十五年の間に彼との交流は数え切れない。東京に行くとは必ず、目黒区一―一にある都研へ足を運んだ。

教育相談について研究している方はたくさんいるが、大ていは大学の心理学系の先生方であってそれも問題児を心理治療(Psychotherapy)によってなおしていく方法に終始し、

縁・学会裏ばなし

河野 稔



を燃やしてきた現職、又はOBたちであった。都立教育研究所の今井五郎、栃木の日野宣千、千葉の大木みわ、放送大学の向後正、上武大学の土田収縁、山梨の甲斐志郎など。

連中は飯より人間がすき、よくぞ声をかけてくれたと喜び夜を徹して、会員の資格は、全国で当面何人位、会費は、規約は、ライセンスの条件

学校現場の中でどのようにして問題の発生を予防し、ひいては開発的な相談活動を生徒指導や学習指導と関連させてどう推進していけばよいかという辺りになると、橋がかけられていない。

さて本郷にかけつけた連中はといえ、すべて都道府県の教育センター(研究所)でそれこそ長きにわたって学校教育相談の深化充実に情熱

は……などと話つきなかつた。

歴史は夜つくりられるというが、このような経過を辿って、昨年山梨で第一回目の学会総会をもち、この段階では二十三県五十五名であった。

この結論を各県に持ちかえり、入会資格の条件にかなう者をリストアップしてPR第一報を届けた。そして理事として高知大学保健管理センター所長(教授)沢田丞司氏、県教

育センター松本・高橋研修主事、県相談員北村唯吉氏を選任した。こうして高知県における学会は全国に先がけてそのスタイルを整え、去る七月二十二日、高知会館に入会者ら百余名参集のもとにスタートを切った。勿論早大教授、日本学校教育相談学会会長小泉英二氏が第一声という大選挙じみているが静かな口調の中で約二時間参会者をひきつけた。高知新聞でも二度三度ワイド版でとり上げられ、有名人なら必ず登場する「ピープル」というコラムにも人物紹介や抱負が掲載された。

学校教育相談は、はじめクリニク(相談所)で問題児を治すやり方で導入され、主として一対一の関係に終始してきたため、学校という多様な場にはなじみ難く、しかしこの原理を応用しようと努力しその中で試行錯誤し模索を続けてきたが、その貴重な努力や成果が必ずしも次の世代に引き継がれているとは言えない。この辺で諸課題を止揚しておきたい。学校教育相談は専門的なカウンセリングや臨床心理学の応用でなく学校という場に即した理論や方法を現場教師によって確立していかなければ。結論は自らで出そう――そんな学会のスタートとなった。暖かい御声援をお願いする次第である。

(日本学校教育相談学会理事長)

焼畑農業

坂本正夫

土佐の山村では昭和二十年代まで焼畑農耕が盛んでしたが、これは樹木を伐り倒して焼き、無肥料で作物を栽培し地力が減退すると放棄して新しい畑を造成する原始的な農法でした。

焼畑は焼く時季によって春焼き畑、夏焼き畑、秋焼き畑の三つに分れますが、土佐では春焼きと夏焼きが多く見られました。また最初の年に栽培する作物によりキビ山(春焼き)、ヒエ山(同)、ソバ山(夏焼き)麦山(秋焼き)などと呼ぶこともありましたが、どこの山を伐るのかは木の繁り具合や土質、位置、陽あたりなどを見て選定します。しかし各家がばらばらに焼畑を造成すると、隣接地の樹木で日陰になり作物の出来が悪くなったりするので、ムラで計画的な土地割替えをおこなっていた地域もありました。

山伐りは鎌でかすら、茅などの下刈りをしながら柄鎌で立木を切り倒しますが、大木は柄鎌で枝打ちしてから手斧と鋸を使って伐り倒します。特に大きな木は枝を打ち落してそのままにしておくこともあります。このような木をオロシ木と呼んでいました。また少し大き目の木は地上一・五米ぐらいの所で伐り土砂流出を防ぐとめ木を支えたり、収穫後の

作物を掛けて干すのに用いたりすることもありました。

山焼きは暦を見て三隣亡のような悪い日を避けますが、乾燥し過ぎると山火事の危険があるし、乾燥が足らぬと焼け残りが出来るので、山焼き日の決定はなかなかむづかしい。いよいよ山焼きの日が決まると、近隣の者たちが手伝って焼きます。土地割替え制がある所で共有地、組地



などを焼畑にするときには、集落や組が総出で山焼きをすることもありました。

当日はまず周囲の枯れ枝や葉をきれいに取り除いて幅五・六米、場合によっては十米以上の防火線を作ります。ついでに「飛ぶ虫は飛んで逃げてくれえ、這う虫ア這うで逃げてくれえ」(物部村)、「飛ぶ虫ア飛び出え。這う虫ア這い出て来い。さあこれから火を入れるぞ」(本川村)などと唱えてかしわ手を打ち、山焼きの無事を山の神さまに祈願していました。

火伏せの祈願が終ると、火種の火を長い竹松明に移して最初に斜面の上端に火をつけ、数人の男たちが火勢を見ながら、順次下方へと火をつけながら降りて行きます。残りの者たちは青柴を束ねたものを持って周囲にひかえ、火が他へ広がりにくくなるかと打ち叩いて消しとめていました。

焼畑ではヒエ、アワ、ソバ、麦、大豆、小豆、トウキビ、里芋、甘藷、大根、三椏などを栽培していましたが、これらの作物をどのような順序で栽培するかは地域や時期によって若干異なっていました。

(高知県立小津高校教諭)

室戸市吉良川の田楽能

高木啓夫

室戸市吉良川の「田楽能」というよりも、「御田八幡の子授け」といった方が頷けるかも知れない。

この子授けは田楽能の一場面にすぎないのだが、酒絞りをする老女が、酒桶の中に神の子を産みおとす。木偶の神の子を「産まれたぞ」と絶叫して高く抱きあげると、二・三十人の婦人たちが神の子めがけて突進する。神の子を奪い取り肌身に触れさせれば、やがて胎児を得るといふ信仰がある。わが子を産み育てたいと念ずる思いが、あの必死というべさか、狂乱というべさかの様をみせるのである。そしてその狂乱の中に尊ぶべき女性の感情を垣間みて感動するのである。

「田楽」とはその名の通り田植の祭である。稲作の過程を芸能として演じてみせるものである。牛、田打ち、えぶりさし、田植、田刈りなどの演目がそれであり、殊に華麗なる衣裳を纏った早乙女たちの「田植」は圧巻である。



稲作を祈願する「田打ち」。

こうした田植の神事を行うには神を迎えなければならぬ。それが練り、女猿楽、三番神、翁の演目である。神は翁や嬪の姿に変わって人間界に降臨する。

終演には幽霊を鎮める小林、悪霊邪悪を鎮める地堅めという演目がある。つまり豊作を願って五月という聖なる月に稲作の一部始終を演じて

みせることは、そのままその年が豊作であることを意味するのである。神仏の加護のもとでそれが行われるのである。これが「田楽」と称せられる由縁である。

この田楽の幕合には殿と冠者とが登場して進行役を勤める。狂言の太郎冠者にはおどけ者が多いが、吉良川の冠者もまた同じではあるものの、吉良川田楽の冠者の職能が発達し、一つの芸域をなしたのが、現在の能狂言における太郎冠者である。その意味で吉良川の殿と冠者は日本の芸能史上から注目すべきものである。

幕があげば謡曲によって進行する。その詞章は室町時代を遡るものとさ



幽霊を鎮める「小林」。

れている。「田楽」は能形式で進行しているわけである。

このように「田楽」を内容として「能」形式で進行するところから「田楽能」といわれるのである。古代信仰を背景にして、古い能形式を伝えるにばかりではなく、その内容の密度の濃さは全国的にもその例をみない。

権勢を誇った社寺の多い都ではともかく、この四国の偏土になぜこれほどの芸能が伝えられたのであろうか。この解けぬ謎が吉良川田楽能をより感動的なものにしていく。その感動が芸能に濃厚さを与え、人々を魅了してやまぬのである。

(高知県立高知工業高校教諭)

国会議事堂中央玄関から入り、中央塔の真下に吹き抜けの中央広間がある。ここに板垣退助・大隈重信・伊藤博文の三体の銅像が飾られている。

一九三八年に大日本帝国憲法発布五十年記念事業の一つとして、この三人の銅像を建てることになり、作業に着手した。そして前年竣工したばかりの現議事堂に三体が据えられ、憲法発布五〇年記念式典の前日である二月一〇日に除幕式が挙行された。

銅像製作者は板垣を北村西望、大隈を朝倉文夫、伊藤を建昌大夢が担当したのだが、板垣像について完成直前に重大な問題が発生した。その内容を衆議院憲政記念館の伊藤光一「歴史がもたらした議席―板垣退助銅像由来―」（『土佐史談』一六一号）から引用しよう。

「近藤英明元参議院事務総長（当時貴族院書記官）の話によると、「中央広間は、開院式に天皇が通られる、銅像とは言え、ポケットに手を入れた姿は不敬ではないかと言うことが各派交渉会の問題となった。作者に質ねたところ、板垣伯を表現するため、考え抜いた末のポーズである。指一本髪一筋変更する事は、美術家としての良心が許さない。という返事だった」と。」

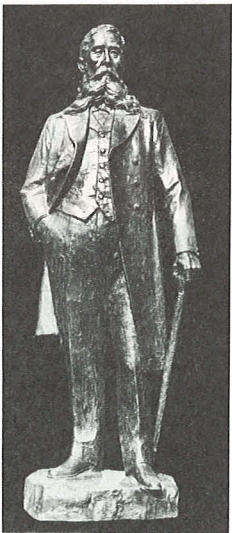
伊藤氏は続けて「昭和十年『天皇

機関説』問題で美濃部達吉博士は糾弾を受け、貴族院議員の辞任に追いこまれている。右傾していく時代の風潮の中で、一芸術家の信念は、不敬論に抗して屈しなかった。作者北村の勁直さには、板垣の遭難時の気概と相通するものを感じられる」と

生き続ける自由民権 ②

板垣退助銅像

外崎光広



国会議事堂中央広間の板垣退助像

評している。写真は作者が信念を貫いて完成した現存の板垣像である。なお板垣は帝国議会開設に際し、事前に貴族院議員を辞退したから、大隈・伊藤とは違い一度も帝国議会議員の経歴がない。にもかかわらず国会議事堂の

中央広間に立っているのは、歴史がくだした審判だろう。

北村西望は長崎市の原子爆弾の被災を記念し、平和公園にどっさりすわっている青年裸像―平和祈念像の制作者だったことに、私は板垣像とのえにしを感ぜずにはられない。

板垣は銅像が多いことでも有名である。最北は日光市である。ここに板垣像が建てられたのは、一八六八年の戊辰戦争に際し、新政府軍を指揮した彼の知略によって、東照宮のある日光を戦禍から守ったことによる。

一九八四年三月のこと、高野観光の自由民権ツアーが日光に到着したのは、東照宮の拝観門限をすぎたのだが、土佐から来たことを話したところ、青年神官がさっそく門を開き、親切に案内した。そして陽明門の前の石畳をさして、板垣先生はここにひざまづいて、祭神家康公に拝礼したと、その時見えたようなたくみな説明だった。

東京には前記の国会議事堂のほか芝公園にも板垣の銅像があったのだが、十五年戦争の末期の金属欠乏のため、「忠召」と称して取りこわされ、現存しない。

東京の西方青梅市釜の測緑地に、多摩川の急流を静かにみつめる等身大の板垣が立っている。かつてこの地方を遊説した彼を偲ぶ地元有志が、一九六一年五月に建立した。

つぎは岐阜である。一八八二年四月六日刺客に刺されて「板垣死すとも自由は亡びず」と叫んだ、永遠に生きるにちがいない台詞を記念する像である。

最後は高知公園登り口のスマートな像である。

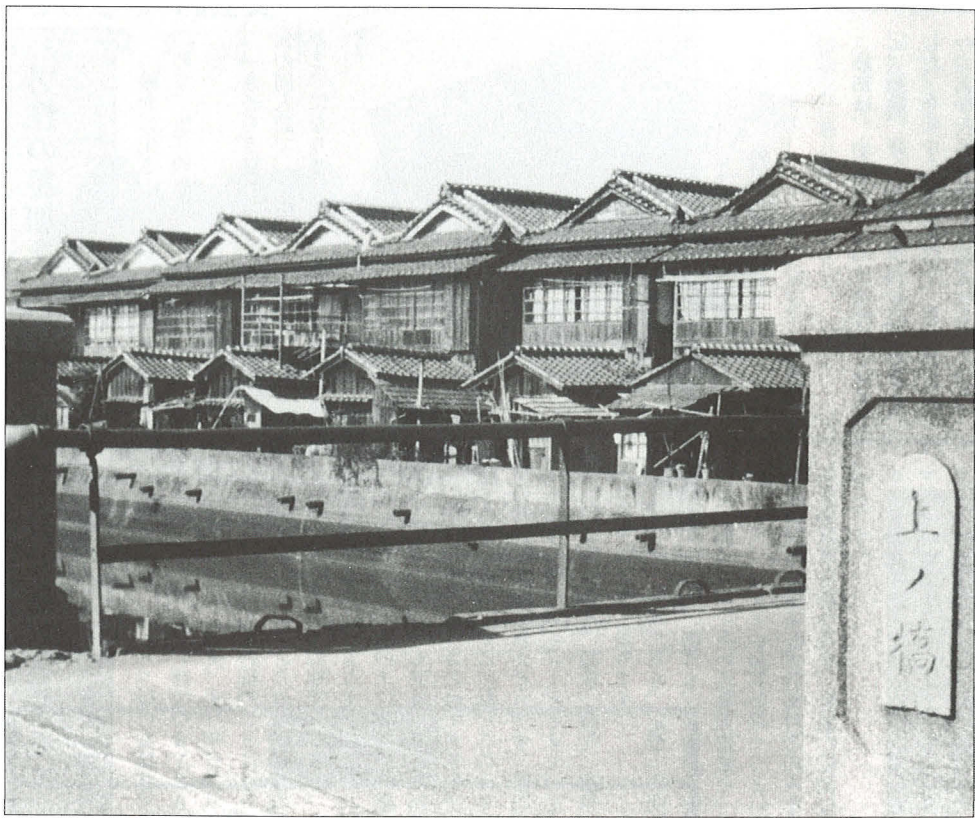
日光・岐阜・高知はいずれも戦後の再建であるが、このことは彼が生きてきていることなよりのあかしである。

（松山大学教授）

高知を撮る

上の橋と大川筋の家並み

松本 英夫



— 第4回高知の映像コンテスト入選作品 —

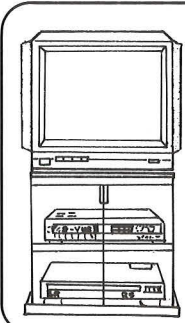
いい加減狭い部屋に、大画面のテレビがでんと座る。書棚の中に書物ほと言えはほんの僅か、それと分るマンガ本の他はいつの間にかビデオテープやCD、カセットテープの置き場と化している。机の前の空間はコンパクトなシステム・オーディオ・コンポーネントがかっこよく占領する。もちろん、ダブルカセットにCDプレーヤー付きた。車に乗ればカーステやカーCD、果てはカービデオ。通勤・通学時にはもちろん、外出時はいつもウォークマンやウォークディスクマンを携帯する……。

見たい、聴きたいという現代人の欲望を刺激し、充足せんがために、売らんかな精神で目先のデザインを変え、次々と新商品を市場に出す業界。

音楽のある生活、世界の出来事、諸々のエンターテインメントが享受できる生活―言えは聞こえはいいが、まさにAVどっぴりともいえる昨今の風潮を見ていると、これでもいいだろうかと

現代風俗を考える〈9〉

AVライフ



確かに大画面で見るスポーツや映画・音楽のシーンは迫力がある。衛星放送ともなれば、嫌なコーストやちらつきもなく、画像も鮮明。カラヤンやポリシヨイがいながらに見られ、しかも即座に（録画して）自分の物にできるという魅力は捨てたものではない。さらに「コピー一杯の値段で、好きなアニメや映画が好き

な時に好きなように見られるというレンタルビデオの人も留まる

ところを知らない。

だが、ちよつと待て

よ。これらは何れも一

方通行、受動的で対話

がない。人と人を結ぶ

活動がない。知らず知

らずの中に思考力を減

退させる危険性を内在

してはいないか。

時は秋。読書の季節。

週に二〜三冊は本格的

な読書を、とまで力まなくとも、せめて見た映像、聴いた演奏の批評なり、感想なりを形にする負荷を自らに課してみてはどうか。或いは、今話題の8ミリビデオを駆使し、変わりゆく街の姿をきちんと記録する行動を起すのでもよい。何れにしても主体的、能動的な活動をこそ大切にしたい。

男性の参加を

横田扶三代

「確かに生きる」あかしという願いをこめて、生への思惟を記そうと発足しました。

「きさらぎ誌」は一九八四年八月に創刊の同人誌で、この四月、一七号を数えるまでにになりました。



最初は、小説、エッセイ、評論、旅日記、短歌、詩など全く自由に記してきました。今年から内容を絞り、短詩型を除いて文章表現のみの作品としました。そのからなのか、優れた作品がおく見られるようになりました。

一、二名で発足しました会員は、常に二一〜三名と安定しています。年齢は二十九歳から八十二歳と層は厚いのです。

詩誌「オリーザ」

日常的平凡を旨として

吉本 青司

「オリーザ」は、ちっぽけな雑誌ですが、オリーザとはラテン語でORYZAで稲(イネ)のことです。オリーザジャポニカと言え、日本種の稲のことに成ります。格別に変ったことのない、その辺りに生えている普通の稲であります。

今年の稲も豊作のようで、朝々、バスの窓から眺める稲穂の上にも雀除けの網が金色に被せてあるのも興味が感じられます。そんな風景も、きわめて日常的で平凡そのものです。そこに私たちのオリーザの特色もあると言えそうです。詩の意味を私は広義のポエジーと考えていて、現代詩はもちろん、短歌、俳句、川柳、すべてを詩と見ております。

オリーザの仲間たちも、定型への関心は早くから持ち、創作も、自由詩、短歌、俳句、散文詩、いろいろな面にわたっており、エッセイストと言ってよいような仲間もいますし、散文詩の巧みな有名な小説家もおります。音楽と絵画に素



隔月の勉強会では、歯に縛着せぬ感想発表を和気あいあいに行っています。ただ、男子会員の少ないのが悩みの種、男性の入会を歓迎します。

発行回数は年度始めに会員の話し合い

定めていますが、これまでは年二回〜三回となっています。

表紙絵、カットは同人の美馬須美子さんの作で、毎回あじわいのあるカット画は誌上に華を添えています。

連絡先 高知市塚ノ原一三三六

電話 〇八八八―四四一四二九八

材を求めるエッセイストもいますし、書店主として出会った人々のエピソードを興味深く書いてくれるエッセイストもおります。

今日のテーマや、現代的なセンスが、主宰者の私が考える現代詩の興味と一致するからです。いわば、オリーザジャポニカの日常的平凡を旨とする私の詩精神だからです。

よろしくお願いたします。

連絡先 高知市加賀野井二二二一九

電話 七五一八〇三六(吉本)

四国フィルハーモニー管弦楽団

機動力を生かして地方公演も

山本 晃司

四国フィルハーモニー管弦楽団は、前のおり四国を活動エリアとしてとらえ、現在は高知県内を中心に演奏活動を展開しているオーケストラです。また、演奏形態もフルオーケストラだけでなく、弦楽合奏、木管アンサンブル、室内オーケストラなどの小編成での活動も精力的に行っています。特にこれら小編成の場合、機動力を生かしての地方公演も多く行っています。

オーケストラを構成するメンバーは、高知、愛媛、香川、徳島の四国四県にとどまらず、遠く広島、兵庫など瀬戸内周辺からも熱心に練習に参加しています。



神戸から練習に来ている一人です。なぜこのように遠方からも練習に来るのか、理由を考えてみると、オーケストラのメンバー個々の演奏レベルが高いのでアンサンブルが楽しいこと、メンバー一人一人が個性的な人間で面白いこと、そして最も大きな理由は演奏会を聴いて下さった聴衆の皆さんが、「四国フィルの演奏

高知8ミリ映画友の会

自作のビデオで交流

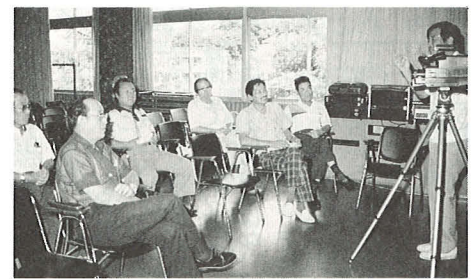
前田 幸一

十五年前に8ミリ映画の作品を制作していた仲間が集まってクラブを結成。名称は8ミリ映画友の会。現在、会員数は、五十歳代以上を中心に六十数名です。クラブの名は「8ミリ映画」ですが、実態は手軽に撮れてすぐ見られ、編集も簡単で経費も安いビデオカメラでの作品が主になっています。

この会は、毎月第二水曜日(18時〜21時)の例会、第三日曜日(9時30分〜12時)の勉強会、同じテーマでの撮影会等の活動を行っています。例会では、会員が制作した作品を持ち寄って上映し、カメラアングル、編集、効果音、ナレーションなどについて意見を出しあい、お互いの技術向上を図っています。

月例会の作品は、家族の記録、山登り、旅行、郷土芸能や自主制作のビデオ作品等いろいろです。

勉強会では、ビデオカメラ



を聴いて勇気づけられました」と満足されることです。演奏者にとってこれほど嬉しいことは他にないと言えるでしょう。

我が団の創設目標に「自らの音楽レベルの向上と、より高い音楽空間の創造」とあるのはまさにこの演奏者の幸せを得ることであり、これが聴衆の皆さんの幸せに繋がることと信じているからです。

今後とも、私たちの活動のご理解、ご支援の程よろしくお願いたします。

連絡先 セルボン高等外語学校(長谷川)

電話 〇八八八―九一―六四〇二

ラで撮影する場合の基本的な知識、作品の編集の仕方などについて話し合っています。

この他、会員の自信作品を会員以外の人に見てもらうための作品の発表会を年一回開催しています。

月例会、勉強会の場所は市民図書館3階視聴覚ホールで行っています。会への参加は自由ですので一度、例会に参加してみませんか。歓迎します。

連絡先 高知市民図書館3階視聴覚

電話 二二一八―二一内線三八六二

散歩の途中で



高知市の北山、椎名峠から東に500m程の所にある「望六峠の茶店」。秦泉寺から七ツ淵参道を歩いて登ると約50分。昔は神社の例祭(月の12〜13日)にはアリの行列位、よう人が登っていたという。日曜・祭日には、明治の頃から続く手作りの「手挽きのそば」や「たけのご寿司」を求めて来る常連客も多い。

風伯

寒い旅温かい旅

一泊か、二泊の旅に出る。大方辺境ばかりの歩き旅である。山は寂れている。廃屋が谷に潰れ込み、カズラに巻かれた、かつての庭木を見たりすると、心が痛む。

だが、標高五、六百もあるうかと言う山村

でも、果樹、園芸樹、高原野菜などの、特質を生かした産品を持つ所は強い。鯉のぼりが勢いよく泳ぎ、次代も育っているらしいのは、よそ目にも嬉しい。

また、町や村が人を迎えようと、何かしら心遣いしているのは、通過するだけでも伝

わってくるものだ。集落へ引いた飲み水のホースを、わざわざ山道で一本切ったあたり、丸太を転がして、それとなく休み場を作ってくれてあったりする。

ある日、山合いの盆地を歩いていたら、小中、高校生、出会う人みんなが、「今日は」「さよなら」と挨拶してくれた。

春、その町にはメーンの道路に、チューリップが植えてある。黄、赤、紅紫、白。可愛らしい天向きのお椀が、そうだ、一キロも並んでいただろうか。

コンクリートを一直線に張るのもお金。花の球根を植え込むのもお金。実用よりも、時には無用の用に、人は心を動かされる。お金が温かく使われてあるのを見ると、大切にされている人と暮らしが思われる。もう一度来ようと言う気にもなる。(や)

文化セミナー'90 〈後期〉

～ 現代人のこころを探る ～

- * 9月11日(火)午後6時30分～ 於：高知共済会館3階ホール
テーマ：『東洋文化に学ぶ生き方の知恵』
講師：石川 光男 氏 (国際基督教大学教授)
- * 9月29日(土)午後1時30分～ 於：高知グリーン会館2階ホール
テーマ：『心と気と魂の文明誌』
講師：鎌田 東二 氏 (國學院大学講師)
- * 10月11日(木)午後6時30分～ 於：高知共済会館3階ホール
テーマ：『社会の未来とこころの未来』
講師：高橋 巖 氏 (日本人智学協会代表)

〈参加費〉各回 500円 〈定員〉各回申し込み先着 100名

お申し込み、お問い合わせは、文化振興事業団まで

見えないものが見えてくる—不思議な国メキシコ

Mexico Magico

メヒコ マヒコ

利根山光人展

9月18日(火)～9月30日(日) 午前9時30分～午後5時

〈場所〉自由民権記念館 自由ギャラリー *入場無料、9月25日は休館日

利根山光人×窪島誠一郎 トーク&トーク (座談会)

〈日時〉9月22日(土) 午後1時30分～3時

〈場所〉自由民権記念館 民権ホール *入場無料

*トーク&トークに参加希望の方は、文化振興事業団までお申し込みください。

財団法人 高知市文化振興事業団
〒780 高知市本町五丁目二番三号
TEL(〇八八八)⑦④三三六五
郵便振替 徳島8-14869

高知画壇の第一線で活躍してきた重鎮の美と画業についての珠玉のエッセイ。美術学校入学から高知大の教授時代、渡欧の体験等、多年にわたる業績を振り返る。また、初期から関わってきた県展の知られざる内情や、ヨーロッパで見た名画を中心に語られる肩の湧かせる美術エッセイ集。挿画として十六点をカラーで掲載。

筒井 広道 著

A5変型・二五六頁
定価 二、〇〇〇円

画帳の歲月

筒井 広道
画帳の歲月



高知市文化振興事業団